『いえ、妾は既う此方へ置いて頂けば、それで宜しんです。一日押入の中に隠れて居ても好いんですから……』と登女子は言出した。

『然うも行くまい。これは何んとか工風しなければ成らない』と畫伯は重大事件として心配し始めた。

此時に思ひ掛けぬ好い隠家が出來た。それは展覧會の『梅と女』の畫を引取つた渦邊子爵家である。

子爵富丸といふ方は未だ十二歳の少年であるが、其母堂が總て後見をして居られるので、其方が却々美術の嗜好もあり、其他の趣味にも富んだ方で『梅と女』を買はれたのも、其後室の鑑賞からである。

白田は繪を持つて同邸へ伺候した時に、談が其モデルに移つた。

で、其モデルの實在の事から、實はこれ〳〵の境遇だと餘りに差支へ無い程度で話した處が、後室は酷く同情されて、然ういふ女なら、當分屋敷に置いても好いからといふ事。

畫伯は大喜びで、何分お願ひ致しますると一人で呑込んで歸つて來た。

此事を聽いて、登女子は、少し困つた。華族のお屋敷なんて窮屈で、迚も妾には辛抱が出來なからうなんど、そんな事も云つて見たが、何、今の華族は、そんな、難かしい事は有るまい、それに屋敷が白金今里で、一寸市中の繁華から遠ざかつて居るから、妾を隠すのに都合が好からうと、いよ〳〵それに極めた。

それで、白田畫伯は、畫の賣れた中から綿入りながら新しい着物や帶など買つて着せて、お屋敷だから嶋田が好からうと、髪まで結はして、近所に海坊主の居さうも無い時を選んで、帆俥で走らした。

無論、畫伯は同行した。

高力松の邊で如何も海坊主らしい奴に出會つたけれど、幌が掛つて居たので、幸ひに認められずに濟んだ。

(四四)

白田に連れられて登女子は無事に渦邊家へ入る事が出來た。先づ之で當分は大丈夫だと思つた。

却々廣い地面であるが、建築は大分古く成つて居る。でも廣い事は矢張り地面相應である。餘りに間數が多いので家の中で迷ひ子に成りさうだ。

當主富丸子爵は學習院の寄宿舍に入つて居るので、逢ふ事は出來なかつたが、後室の俊子刀自には、お目見得が出來た。

四十五六歳の方で、肥えた、福々しいお顔で、頭は切下げ髪にして、被布を着て居られるが、却々敎育の有る御方と見にて、白田畫伯の繪畫上の談話なども、難かしい事を能く辯じられる。

それも其筈であらう。故子爵は全權公使として海外に滯在せられた事もあり。刀自は夫人として同行して、交際場裏にも立たれたのだから、ハイカラ風も一通りは知つて居られるので、それが今は斯うした謹愼の態度で居られる處に、言はれぬ床しさが見ゆるのである。

それから當子爵の姉君に當る房子姫といふのにもお目に掛つた。

此方は又非常なハイカラである。

壽伯は、何分よろしくお願ひ申しますると、吳々も登女子の事を依賴して置いて歸つて行つた。

後で俊子刀自から、種々身の上に就いてお問ひがあつた。

非常に同情の深い方らしい。

「なに、屋敷の内に居れば、昔のお城の中に居るのと同じ樣ですから、何も心配する事は有りません。其代り外出の時の供をして、見物に行く事が出來ませんから、

それが其方に取つては苦痛でせう』など言つて下さつた。

それから老女を呼んで引渡された。

老女は又他の女中達に紹介した。お表と云つて家扶達にも紹介された。

御用と云つては受持の部屋の掃除。それから主として房子姫の御用を承はるのであつた。

斯うして一週間ばかり過した。

少しは屋敷内の様子が分つて來た。

朋輩達も、そんなに惡い人ではないが、何分にも昔から傳はつて居る御殿女中氣質が抜切らずに居る。

詰らない見榮を張るのは珍らしく無い。

御用の無い時には、皆お詰といふ間に集まつて、種々の話をするのである。時に由つて問題は變つて行く。

今日は軍人が題に上つた。

『妾の兄さんは陸軍中尉よ。今に空中飛行の方へ廻つてよ』といふ人がある。

『妾の叔父さんは海軍少將なんです。今は後備ですけれど』といふ人もある。

『妾は金鵄勳章を持つた方でなければ、婿に仕ませんわ』と手厳しいのを言ふ人もある。

それからそれと話に枝が咲いて、日露戰爭の勳功談に及び、花々しい戰死者に就ても大分出たが、此時突然一人が。

『そんなに皆んな忠義を勵んだ中に、少數の非國民が有つたのは、殘念でしたねわ』と言ひ出した。

今まで小さく成つて聽いて居た登女子は、頭から水を浴びせられたやうに感じた他の一人も、それに乘つて。

『露探が有つたさうですね。軍事の秘密を賣つた奴が有るんですッてね』

『えゝ、何んとか云ひましたね。其頃の新聞にはチョイ〳〵名前が出て居ましたが其奴は通譯か何かで從軍して、わざと捕虜と成つて、露軍に投じたんですッてね。それも天罰で、彼地で死んで了つたさうですね』

『もしそんな奴の子に生れたら、どんなでせう』

『妾なら自殺して死んで了ひますわ』

『えゝ、えゝ、如何して生きて居られるもんですか』

知つて言ふのか。知らずにか。

『何んだか當て附けられる樣に登女子は感じて、息が出ぬ程心苦しい。

『ねえ、お登女さん、貴女は先きから默つて居らッしやるが、如何考へて居らッしやる』と一人念入りに問ひ掛けたのがある。

『え……えゝ、……そんな親を持つた子は……どんなに面目無いか知れませんねえ』

つい涙が出掛るのを、此處で見せては疑はれると、眤と我慢する其苦痛。唯一滴の涙を零さぬ爲めに、五臟六腑の血は悉く絞られた。

(四五)

登女子の父豐岡泰輔は、露語及び蒙古語に精通して居た。

ニコライ正教神學校を出て久しく浦鹽に住し、西比利亞の旅行又は蒙古探檢など數々行つた。

それは併し或筋の內命を受けてといふ話である。それが爲か如何か、交際した人の中には、陸軍將校や、憂國の志士が多かつた。

それから某新聞の通信員などを兼て居た事があつた。

それが日露の國交斷絕と共に、通譯官と成つて軍に從うた。

其時は登女子は漸く七歲であつた。

朧氣に記憶して居る父の顔。

露探なんて仕さうには如何しても思はれない。國賊と成る人とは如何しても思はれない。

何かの間違ひで然う成つたのであらう。生きて居られたら雪冤も出來たのだらうが、何分にも露領で死んで了はれたのだから、今更辨解の仕ようも無いのだ。

何んといふ情けない身の上だらう。それには既に泣盡して居る。今までにどの位血の涙を零したか知れないのだ。今は泣くよりも、泣く以上の胸の痛みを覺えるのみ。

朋輩達が賣國奴に就て攻擊しやうとした處へ、お客來！

それは同族の河宮常美といふ貴公子である。

『あッ常美樣が入らッしやッた』

『まア河宮の若樣が……』

と若い人達は大騒ぎだ。

『姫樣が又お喜びでせうよ』

『あら、そんな事を言ふものでは有りませんよ』と戯れつ、たしなめつ。

どんな方かと登女子はお茶を運びながら見た。成程女中達の騒ぐ通り、常美と云ふ貴公子は立派な方だ。若い光のある。本統に誰でも慕はしく感じる容貌である。

これは房子姫と御許嫁の間だといふ事で。從つて二人の間は寛大だ。

間もなく常美と房子とは手を携へて庭へ出られた。

今日は滅切春見えて、銀丁子などは咲掛けた。庭の到る處に花の香は高い。

それを見送つた登女子は、思はず溜息が出た。

幸福な身の上の方達だ。

身は華族と生れて、何んの不自由もない生活をされて、然うしてあの樣に好いた同士で、公然と手を携へて庭を歩かれる。

自分には好いた男といふのは無い。有つたけれど、それは戀と成るまでに死んで了つた。それに似た人が親切にして呉れると思つたら、恐ろしい大賊であつた。

後を追うたり、捕まへて言寄つたりするは、あの海坊主の勘兵衛や、乞食の蛸助半兵衛や、船頭の半太や、それでなくば狂人の近間である。何んといふ情け無いのだらう。

今の若殿の樣な御方に迚も愛され樣もないが、もし戀の渦卷に入るのならば、あの樣な御方と……。

其所まで考へた處へ、後室の俊子刀自が出て來られて。

「あッお前はね、庭へ行つてね、姫を一寸呼んで來てお呉れ。直きに用は濟みますからと云つてね」と命じられた。

「はッ」とお受けをして登女子は庭下駄を穿いた。

初めの間は、飛石を踏んだので、下駄の音が高かつたが、内庭を出てからは、土

の上なので、忍び足でなくても足音は立たぬ。

庭は廣いので、何處へ行つて居られるか一寸分らない。

既に散つた梅林を過ぎ、未だ蕾の櫻林を過ぎ、茶畑の方から廻つて、小亭のある方へ行かうとして、ハッと登女子は顏を赤くした。

それ切足が前へ出なく成つた。

驚いて散つた鸚鵡が、又啼出した。

ばたり、ばたり、椿の花の落ちる音。

(四六)

登女子が立留つて後へも前へも行けなく成つた處は、春日式の石燈籠のある處であつた。

それから小亭までは、そんなに遠くは無いのだが、庭の造りが巧に出來て居て、餘程遙かに思はれる。

然うして其間に霞でも掛つて居るか。或は常美の吸うた卷莨の煙でもあらうか。何となく濛々として居て、判然しない。

だが、小亭の中に腰を掛けて居る房子姫の束髪に、蝶が止まつて嘴を附けて居るのが見える。或は簪かも知れないけれども。

又小亭の柱に凭れて立つ常美の殿の胸のあたりに、同じく蝶が止つて居る樣に見える。或は花を挿して居られるのかも知れぬ。

斯うして二人の距離は隔たつて居るのだが、此方から透して見ると、胸の蝶と髪の蝶と重なり合つた樣に見えるのである。

それは好いが、何か餘程親密な話をして居られる樣なので、其所へ行くのが如何にも極りが惡い。

と云つて行かずには居られぬので、踏まなくても好い石を踏んだり、出もしない咳を立てたりして、小亭へ近寄つた。

何をしに來たのかといふ風に房子は登女子の方を見た。其顏は四邊の花の色のうつろひで薄紅く見えた。

『何？』と房子から問掛けた。

『後室樣が一寸……一寸でお宜しいのたさうで、直き御用が濟みませうですから……』と登女子は言つた。

『一寸の用なら、後にして下されは好いのに……今妾の方では大事なお話が有る處よ』と房子は登女子の心無しの樣に言つた。

常美は、それを宥める樣に。

『まア行つて入らッしやい。私は何時までゞも待つて居ます』と言つた。

『然う、それでは一寸行つて參りますわ』と言ひつゝ、房子は小亭から出掛つた。

バラ〳〵と膝の上から、紅い白い花瓣が落散つた。何やら取つて手弄りにして居たのだらう。

登女子も附いて行かうとした。

『其間退屈です。その女中を此處へ置いて下さい』と常美は無雜作に言ひ入れた。

『あ、宜しふ御在ますわ』と房子も輕く承諾して、急ぎ足で行つた。

登女子は小亭の外に立つて困つて了つた。何の話も有るものでは無い。日には照れて顏が赫々とするばかり。

『今日初めてお前を見たね』と常美から言ひ出した。

『はい……』と登女子は微に答へた。

『何んと名を……』

『登女と申します』

『登女か……覺えたら私は忘れない。登女だね……登女……』と口の内に二三度繰

返しつゝ顏をヂロ〳〵と見る。

登女子は或る場合に於て、男を男とも思はない。時としては自分を女といふ事さへ忘れるのだが、斯ういふ貴公子に對しては――別して常美に向つては、初めて覺える羞かしさである。

『で、お前は、矢張渦邊家の舊臣でもあるかね』

『い、え……』

『然うかねえ。だと生れは東京だね』

『はい……』

次ぎに來る問は両親の事だらう。それには困ると心の中でハラ〳〵して居た。

と、問は意外の方面に飛んだ。

『お前には許嫁が有るかい』

『おほゝゝ』

登女子は、つい笑ひ出した。

常美も、から〳〵と打笑つた。

存外打解けて戯れ事を言はれる方だと、登女子は一層親しみを加へた。

(四七)

斯うして最少し長く此處に唯二人で居たら、霞や、花の香や、莫の煙や、春の日の光や、それ等が合して身に泌み込んで、うツとりと氣も遠く成つて、鶯が來て耳の傍で啼いても聽えまい。蝶が來て頰に觸つても分るまい。そんな邊まで進み掛けて居た處へ、急いで房子姫が戻つて來た。

既う常美は姫の物である。登女子は小亭を去らなければ成らないのだ。

と知りながら、つい其處を立去り難ねて、磨きの吉野杉の柱に手を掛けて、見掛

けた夢の覺め端の樣な感じを抱きつゝ、立つて居た。

『登女、お前は既う此處を去つても宜しいのよ』と房子姫から言はれたので、初めて登女子は我に復つたので。

『それでは御用が御在ましたら、お呼び下さいまし』と言つた。

『あら、用が有つても呼ぶのが聽える樣な、そんな近くに居なくッても宜しい』と房子は言ひ放つた。

恐入つて登女子は退いた。

此事が有つてから十日ばかり經つてからである。

河宮子爵家で清興會といふが開かれる事に成つて、それに後室及び令嬢が招かれて行く事に成つた。登女子が其御供で行くと定まつた。

清興會といふのは、同族の家族の方が集まつて、共に娯樂を取る目的で、屢月に幹事を廻り持で開かれるのである。

河宮常美は、何か變つた趣向で、大いに喝采を博するつもりで、先づ最初が當代第一流の細川風谷の文士講談。それから活動寫眞が有つて、次ぎに結城孫三郎の操人形でカチ〳〵山を出して、其後へ當日の呼物として、天劇の女優の道成寺といふ番組である。天劇の女優はお座敷で藝をせぬ規約に成つて居るが、他ならぬ華族方の集會で、中には株主の方もあるので、以て特別にそれを出すといふ事で、衣裳は三越、小道具は藤浪、髪は大勝、大道具はわざ〳〵長谷川を勞し、囃子方は杵屋一連。すッかり揃つたのである。

白拍子を勤めるのは、人氣から、技藝から、天劇の女優中第一位と定評のある浦田喜久子。聽いたか坊主には二期生の腕利きが出ると成つて、會員は此最後の一幕を皆樂みにして待つた。

段々演じ進んで、いよ〳〵道成寺と成つて、大變な事件が起つた。急に喜久子が病氣に成つて、如何しても來られぬといふ電話。

常美は蒼白に成つた。

それでは代りをと成つたが、二期生の内からは白拍子に出る者が無い。

他に……。

他に有る譯が無い。

外の女優を呼ぶと成つても、然う急には間に合はぬ。

常美が途方に暮れて居るのを見て、渦邊の後室は密に登女子を呼び。

『お前は銚子に居た頃に、道成寺を演じた事が有りますか』と問はれた。

何度も演じては居るが、それは本統に田舎臭くつて、今日の樣な晴れがましい舞臺で演じられるものでは無いと思つた。

でも、嘘を言ふでも無いと。

『演じた事も御在ますが……既う忘れて居りませう』

後室は勇み立つて。

『此場合です。一ッ度胸で以て白拍子の代りを勤めて御覧な』とすゝめられた。

『如何致しまして、妾などが……』

『なに、どの道天劇の女優程巧くは踊れないと分つて居るんですから、下手でも構ひません。それが又座興です。然うして、まア、此の場のお茶を濁さなければ、常美さんが、お氣の毒な』

常美さんがお氣の毒なといふ一言が、登女子の心を強く刺戟したので。

『それでは、未熟ながら……』とお受けをした。

(四八)

登女子が白拍子の代り役を勤めるといふ事を俊子刀自から常美に知らしたので、大喜び。それでは少しも早くと樂屋へ連れて行つて、化粧に掛らした。

既に坊主に扮裝して居る天劇二期の女優達は、何を素人がといふ風に登女子の方を白い眼で見て居る。

登女子の方から見ると、寧ろ天劇の女優の方が素人なのである、舞臺數は此方が餘計に踏んで居るのたから。

だが、そんな顏は少しも見せず。小さく成つて鏡臺に向つて、大急ぎで顏を拵へた。手も塗つた。衣裳を附けて、鬘を冠つた。

地と一度も打合せずに、出た處勝負。かゝる大膽な事は無いのである。

だが、田舍廻りで這んな事は馴れて居るので、他の者から見ると登女子には、それ程心配する事では無い。

それに登女子の踊の師匠といふのは、仔細有つて東京を落ちて、銚子に隱れて居た藤間某女で、決してはづかしい手振ではあらぬ。

開幕の前に常美が、わざ〳〵口上を述べた。

『突然喜久子が病氣で、出勤が出來なく成りましたが、其代り、隱れたる某女優を して、代り役を勤めさせます』いとふので有つた。

『隱れたる女優？誰でせう』

『サア何者で御在ませう』

種々に推測して居た。

それで一層道成寺の一幕は、人々の注意を集めた。

開幕に成つて見ると、先づ其白拍子が金烏帽子水干の立姿、其美しさに、あアと皆驚いた。

それから舞の手振も却々巧なので、殊に戀の手習ひなど大喝采。トゞ鐘入りまで扱ける程の出來に、見物方は大滿足。

無事に、どころでは無い。豫想以上の成功に、人々は。

『まア如何した娘でせう』

『隱れた女優とは何處から來のでせう』

『大阪から初登りでせうか』

『或は踊の師匠の秘藏娘でせう』

『今度、不意に天劇へ出して、見物を驚かせる計畫なんでは有りませんか』

後の宴會に入つても、噂はそれ計り。

樂屋では、今、頭を取つて、漸く一息入れたばかりの登女子。

其處へ走り寄つたのは常美である。

熱し切つた握手をして、手に持つ造り花を登女子に與へながら。

『どうも御苦勞でした。非常な出來榮で……』

登女子は顏を赤くして。

『如何致しまして……お恥しう御在ます』

『何があれで恥しからう。來賓は皆大滿足で……從つて私は面目を施しました。全

く喜久子が病氣だといふので、如何したら好いかと、途方に暮て居た處を、全くお前に救はれたのです。恩人の内に數へて好いのです』

『まア如何致しまして……妾は又、此方樣の舞臺に出して頂いて、どんなに名譽だか知れません』

其處へ後室俊子も入來つて。

『まア、登女、妾はどんなに嬉しかッたでせう。富丸が運動會で一等賞を取つた時と、今夜とは、妾の忘れる事の出來ない喜悅です』と言つて下さつた。

『來賓の方々に、一ッ登女子の素顏の處を紹介しやうでは有りませんか』と常美は言ひ出した。

『それは如何か御免下さいまし』と登女子は恐縮して、未だ衣裳も脫ぎかねて居る處へ、突と入來つたのは房子姫である。

『阿母樣、既う御暇に致さうでは御在ませんか』と甚しく不興顏である。

『や、如何か宴會の方へお出でを願ひます。之から又面白いのですから……』と常美が心配して留めに掛つた。

『折角ですが、妾、少し頭痛が致しますから……』と房子は言ひ張つた。

これには後室も困つて居られた。

登女子とても、何んだか變に成つて來た。

（引續き後編を御讀み下さい）

泣　か　ぬ　女（終）

◉樋口隆文館
營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版……及び其卸賣を專業と致居候に付各地方の販賣業者諸君……及び貸本を營業とせられる諸君は多少に拘らず御注文被下度候

△卸賣目錄御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ

△樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さずに新版發行致べく候

△樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候

△樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大阪八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文にて汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

大正四年六月一日印刷
大正四年六月五日發行

（定價金五十錢）

著作權所有

泣かぬ女

著者　江見水蔭

發行者　大阪市南區鰻谷仲之町二百二十四番屋敷　樋口源次郎

印刷者　大阪市西區新町北通一丁目五十番地　河上貞次郎

發賣元　大阪市南區三休橋鰻谷南へ入西側　樋口隆文館
（振替口座大阪八七九七）

渡邊默禪君作

日本新聞掲載小説

千里眼 横山花子

口繪執筆者
歌川國松君
谷洗馬君
鈴木錦泉君
川上恒茂君
長谷川小信君

艶麗極彩色口繪挿入美本

本書は日本新聞に連載して大好評を博したる事實小説にして、今を去る二十餘年以前江州に現はれたる、横山花子と云へる可憐の一美人が、神通自在の術を弄して魔法使ひとして驚嘆されたる幻怪奇譎の事實を寫したるものなれども、其裏面には悲慘骨を刻り肉を刻むの消息がある彼女の父は東京府の參事片桐義郷、母は柳橋で嬌名を唄はれし梅吉、しかも薄命可憐なる花子は、僅に三歳、父母に生別してより以來、流離飄零具に辛酸を嘗め、遂に或る動機の捉ふる所となり了して天下の珍たる其身を捧げて蒼波渺茫たる琵琶湖上に奔り去る、其生涯二十餘年の徑路を寫す間に、靈と肉との戰ひ、個人と社會の葛藤の如何に險惡峻烈なるかを說きたる、默禪先生最も得意會心の作にして、其筆力は艶麗にして繪を見るが如く精巧に、其の內容の千波萬波寄せ來つて波瀾重疊の妙を極む、乞ふ一讀して其言の誣らざるを知られよ。

全三冊ニ付
實價一圓四十錢
（送科共にて）

全二冊ニ付
實價金一圓
（送科共にて）

新田靜灣君作
谷洗馬君畫

立志小說 富の力

各一冊共木版
極彩色口繪挿入
全三冊
實價各一冊四十五錢宛
送料三冊ニ付八錢

猛虎と見ては石に箭の穿ちし故事もある、精神一到何事をか爲し得ざらめやと、一朝、富の力の壓迫の大なるに感奮して、猛然志を立てゝ故郷の地を去り、帝都に出でたる水呑百姓の子悴は、僅々十年の短日月の間に、能く百萬圓の大富豪と成り得た、彼は如何なる手段方法にて此富を得たか、如何に奮鬪努力して此富を得たか、彼をしてかく發奮せしめたる動機は何、其處に讀者を感動せしむべき血と涙との物語があるのだ。

島川七石君作
八幡白帆君畫

悲哀小說 罪

全二冊
美術木版口繪挿入
各一冊實價五拾錢宛
送料二冊ニ付金八錢

奇怪なる犯罪事件である。帝都劇壇の花とたゝへられし、佳麗妙齡なる一女優の手によつて世にも恐るべき殺人の大罪が犯されんとした、其裏面には、必す何か陰れたる大なる秘密が無けねばならぬ。そも犯罪の動機は何、戀か、嫉妬か、否、戀にあらず、嫉妬にもあらず、其處に同情の涙を濺かしむる悲痛凄慘なる、且美しき物語があるのだ。

江見水蔭君作
八幡白帆君畫

中央新聞
掲載小説

三怪人

各冊共木版
極彩色密畫挿入
全四冊各一冊
實價金四十五錢宛
送料四冊ニ付八錢
但シ内地限リ

怪賊の一團あり、其行動の幻奇妙怪なる、實に神没鬼出にして、暮顯朝晦捕捉するに難く、而其犯行の陰險兇猛なる、空前未聞の深刻惡辣を極め、近時有名なりしヂゴマ、ポンノーの徒輩をしても、遠く三舍を避けしむる程である、彼等を獲んが爲に我探偵界の巨人は、如何に戰慄すべき惡爭苦鬪を經たか、其處に讀者の心血を衝動すべき、骨を刳り肉を刻む的の痛快壯烈なる消息がある、此怪奇絶妙の事實を寫すに、老巧練熟せる水蔭先生の靈筆をもつてす、洵に稀に見る近來の活小説であると隆文館の主人が敢てお奬めをする。

大阪新報記者
行友李風君作
山本英春君畫

龜甲組

（木版極彩色頗美本）
全三冊
實價各一冊金五十錢
送料一冊ニ付六錢
三冊ニ付八錢

本書は大阪新報紙上に連載して大好評を博せし事實小説であつて、事は明治貳拾壹年に起り、當時、京都、三重、滋賀、奈良の一府三縣の警察界を騷がせし陰慘凄愴なる一大虐殺事件である、編中に動活する人物には、剛俠不敵の壯士あり、出没不思議の怪賊あり、泣血苦節の美人あり、薄命可憐の處女あり、個々入り亂れて各有趣味の大活動をなし、一讀骨動き肉を躍らしむべき、血も涙もある生きた面白い小説である。

千枝子	波邊默禪氏作	上下	各一冊	四十五錢
俠妓小鶴		上下	各一冊	四十五錢
風流菩薩		上下	各一冊	五十錢
横山花子	和田天華氏作	上下	各一冊	五十錢
浪まくら		上中下	各一冊	四十五錢
靜子		上中下	各一冊	四十五錢
戀の意氣地		上下	各一冊	四十五錢
罪ならぬ罪人		上下	各一冊	四十五錢
弱き人	新田靜湖氏作	上中下	各一冊	四十五錢
愛と財		上中下	各一冊	四十五錢
富の力		上中下	各一冊	四十五錢
海の豪傑	鹿島櫻巷氏作	上中下	各一冊	四十五錢
戀の敗者		上下	各一冊	四十五錢

樋口隆文館新刊小説

男	羽蔭夜香氏作	全四冊	各一冊	五十錢
命		上中下	各一冊	四十五錢
武士		全	各一冊	四十五錢
其の	島村抱月氏作	全	一冊	五十錢
香人	五竹圓氏作	上下	各一冊	四十五錢
女	青峯氏作	全	一冊	五十錢
浪がし	小島孤舟氏作	上下	各一冊	四十五錢
梅花		上下	各一冊	四十五錢
澄める心	小川藏堤氏作	全	一冊	五十錢
現代の女生		上下	各一冊	四十五錢

樋口隆文館新刊小說

伊藤銀月氏作	○怒濤	上下	各一冊	五十錢
	○出で潮	全	一冊	五十錢
	○予	全	一冊	五十錢
安岡夢郷氏作	○罪の子	上下	各一冊	四十五錢
	○地獄谷	上下	各一冊	四十五錢
	○怨命	上下	各一冊	四十五錢
	○薄將	上下	各一冊	四十五錢
	○飛軍	上下	各一冊	四十五錢
江見水蔭氏作	○女賊	上下	各一冊	五十錢
泉鏡花氏作	○七本櫻	全	一冊	五十錢
牛井桃水氏作	○慰問袋	上下	各一冊	四十五錢
匿名子氏作	○可憐の棄兒	上中下	各一冊	四十五錢

211
231

終